

<実践報告>

## 英語科における情報発信を目的とする学習活動の効果

橋本直子 愛知県知多市立中部中学校

東原義訓 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

### The Effects of a Website Creating Activity at a Junior High School

HASHIMOTO Naoko: Chubu Junior High School, Chita, Aichi

HIGASHIBARA Yoshinori: Center for Educational Research and Training,  
Faculty of Education, Shinshu University

In Chubu Municipal Junior High School in Chita city, Aichi prefecture, the internet system was introduced in the computer room in the year 2000.

This is a report about an English lesson practice which both increases students eagerness toward English learning and their ability to express themselves in writing.

Using the computer software called StudyNote the students designed websites that introduced Japanese culture in English. Students were able to make websites themselves comparatively easily using this software. The software also enabled the students to exchange their opinions through the classroom LAN (Local Area Network). They were able to learn a lot from each other. In conclusion this entire activity is highly recommendable.

【キーワード】 ホームページ      スタディノート      日本文化      自己表現力  
英語教育

#### 1. はじめに

「教育の情報化プロジェクト」報告によると、教育の情報化を通じて、「子どもたちが変わる」「授業が変わる」「学校が変わる」という状況を目指し、2005年度を目標に、全国の学校のすべての教室にコンピュータを整備し、インターネットにアクセスできる環境を実現するという政策が明示された。それをうけて平成11年12月に、教育の情報化の推進を図る「ミレニアム・プロジェクト」が提唱されたことは周知のことである。

知多市でも平成11年度よりウィンドウズが導入され、12年秋には、インターネットにアクセスできる環境が整備され、教育の情報化のための環境が少しずつ整い始めた。

英語科では、コンピュータを効果的に活用した魅力ある授業を創造し、生徒の学ぶ意欲を喚起させる取り組みとして、インターネットで情報発信することができるスタディノートというソフトウェアを用いて、英文ホームページ作りの実践を行った。

本稿の目的は、スタディノートというコンピュータ・ソフトウェアを活用して、英文で日本文化を紹介するホームページ作成の活動を通して、自己表現力を高め、さらに英語学習への意欲を高める授業実践について報告するものである。

## 2. 英文ホームページ作りと自己表現力の育成

### 2.1 ホームページ作成の意義

コンピュータを活用した授業を実施するにあたって、第3学年の生徒たちに事前のアンケートを実施したところ、「英文ホームページを作成して情報発信をしてみたい」と回答した生徒が89%であった。それに対して消極的・否定的な意見は11%に過ぎなかった。生徒のこの意見を取り入れ、スタディノートを活用して英文ホームページを作成する実践を行なうことにした。ホームページを作成するということは、読んでくれる世界の人々を意識し、世界に直接目を向けて英文を書くという状況が設定されるということになる。このことは、生徒一人ひとりが英語を使って何かを表現したいという気持ちを強く意識し、英語で表現しようとする意欲を喚起することにつながると考えた。

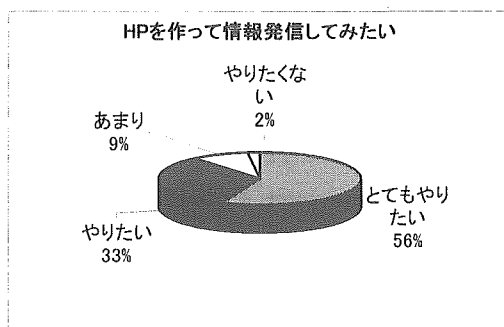


図1 HP作成に対する生徒の意識

### 2.2 なぜ日本文化紹介か

第3学年のニューホライズンの教科書では、第2・3課でわが国の伝統文化が題材に取り上げられており、日本の文化を見直すよい機会となっている。この課の学習の発展として、生徒たち自身がこれまで見聞きし、体験してきた身近な日本の文化を、それぞれの自己表現力の習熟度に従って英語で表現し、海外に紹介する学習活動は、国際理解の第一歩として意義があると考えた。そこで日本文化紹介の自己表現文をホームページ作成の題材として取り上げることを生徒に提案したところ、生徒たちは大いに興味と意欲を示した。

### 2.3 単元の目標

ホームページ作りの単元の目標を以下のように設定し学習を進めた。

- (1) 日本文化紹介のホームページを作ることに関心を持ち、意欲的に作成しようとする。

- (2) 各自の英作文力の習熟度に応じ、外国人にわかるように受け手を意識した内容の英文を書くことができる。
- (3) 辞書や教師自作の英語表現集を活用して、日本文化についてまとまりのある長い文を理解したり書いたりすることができる。
- (4) ホームページで日本文化について紹介するという体験を通して、英語を用いて身近なことを世界に情報発信することへの関心を深める。

### 3. スタディノート

スタディノートは、教室内ネットワークにより、教師と生徒だけではなく生徒同士のコミュニケーションを可能とするコンピュータ・ソフトウェアである。すなわち、「ノート」「電子メール」「電子掲示板」「データベース」の4つの機能を効果的に活用することで、単に一人一人がホームページを作るだけではなく、教師からの助言などを電子メールで送信したり、生徒同士の意見交換や相互評価を行ったりすることも可能となる。本実践では、生徒は「ノート」の機能を利用して絵や文章をワープロ感覚で描いたり打ち込んだりし、「電子メール」の機能を利用した教師からの助言などを活かして作品を制作した。出来上がった作品を「データベース」に登録し、互いに作品を鑑賞しながら、生徒同士の意見交換をし、作品に改善を加えた。最終的に完成された作品を教師がデータベースから一括してホームページ変換することができる。この方法により生徒作品をインターネットで情報発信した。

### 4. 日本文化を紹介するホームページ作りの授業実践

本実践は、中学3年生4クラス104名を対象に、正規の英語の授業と総合的な学習の時間を連携させて6時間完了で実践したものである。実施時期は、平成12年6月中旬から7月上旬にかけてである。本単元の実施を可能とするためには、4時間の正規の英語の授業に加えて、2時間の総合の時間を必要とした。4時間の英語の時間は、Let's Try & Write の1時間分と各単元の終わりに確保されている発展学習のための時間の3時間から生み出した。総合の2時間については、各学級ごとに週1時間設置された学級総合の時間から振り替えたもので、本来総合の時間に育てたいコンピュータ活用能力の基礎を学ぶ時間を英語の時間に振り替えて実施したものである。したがって、英語の授業の中に、情報基礎や総合的な学習の内容を含んだ合科的連携の取り組みと考えることができる。

#### 4.1 単元の計画

本単元は6時間完了として計画した。

- 第1時 「ALTのジョンに紹介したい日本の文化について日本語で書こう。」
- 第2時 「ジョンに紹介したい日本の文化について日本語から英語に直そう。」
- 第3時 スタディノートでHPの構成を考えよう。（モデル作品を参考に）
- 第4時 スタディノートでHPを作成しよう。（いろいろな機能を使って）
- 第5時 スタディノートでHPを完成させよう。（データベース登録・意見交換）
- 第6時 スタディノートでHPを改善しよう。（データベース・電子メール）

## 4.2 実践の内容

第1時では、各自が紹介したい内容を日本語で表現する授業を行なった。「日本文化」の範囲は広く多岐に渡っている。まずは年中行事の例を示して参考にさせ、各自に紹介したい題材を考えさせたところ、その内容は年中行事のみならず、祝祭日、お祭り、伝統芸能、伝統的遊び、武道、民話など、実に様々な分野に渡った。各自の興味・関心にもとづく内容には生徒ひとりひとりの個性が光っていた。

<年中行事に関わる題材>		<伝統的な遊び>	
New Year's Day	お正月	Otedama	お手玉
The First Visit of the Year	初詣	Ayatori	あやとり
Setsubun	節分	Kite-Flying	凧上げ
Doll's Festival	ひな祭り	Hanetsuki	羽根つき
Flower Viewing	花見	Fukuwarai	福笑い
Children's Day	子どもの日	Janken	じゃんけん
Tanabata Festival	七夕	Shogi	将棋
Bon Festival	お盆	<生活習慣・食べ物>	
Bon Dance	盆踊り	Wind Bell	風鈴
Health Sports Day	体育の日	Uchimizu	打ち水
Moon Watching	月見	Tatami	畳
New Year's Eve	大晦日	Junishi	十二支
Mother's Day	母の日	Osechi	おせち
<伝統的スポーツ>		Japanese Food	日本料理
Judo	柔道	Rice Cake Making	餅つき
Kendo	剣道	Chopstick	箸
Sumo	相撲	Umeboshi	梅干し
<伝統芸能・文化>			
Haiku	俳句		
Tea Ceremony	茶の湯		

図2 生徒作品の題名リスト

第2時は、日本文を英語で表現する授業を行なった。これが実に困難を極めた。というのは、日本のことを紹介するためには、日本独特のものを英語で表現することであり、生徒の英語力で説明しきれない内容が多い。生徒の伝えたいという思いと、伝えられる表現力とのギャップが大きいのである。そこで、最初の学級での反省を活かし、2番目の学級からは、よく使われる表現について「教師自作の表現集」をスタディノートのデータベース上に用意し、作品作りの途中に参考資料として生徒がいつでもそれを使えるようにした。その結果、和英辞典や英和辞典だけではなく、表現集を参考にしながら、生徒自身の力で英文を組み立て、文章を作り上げていく学習が可能となった。

第3時からコンピュータールームにて、スタディノートを利用してホームページ作りを行なった。生徒にホームページのイメージを描かせるために、まず教師が事前にモデルとして3ページの作品を試作しておき、生徒に提示した。1ページ目はタイトル、2ページ目は英文、3ページ目は日本文という構成になっている。生徒一人一人が全員3ページの作品を作ることになる。ホームページ特有のジャンプボタンをつけて、タイトルのページ

から各ページにジャンプできるように構成する。タイトルのページには、デジタルカメラで撮った映像を貼りつけたり、絵を描いたりして、ホームページの内容がよくわかるように工夫させた。

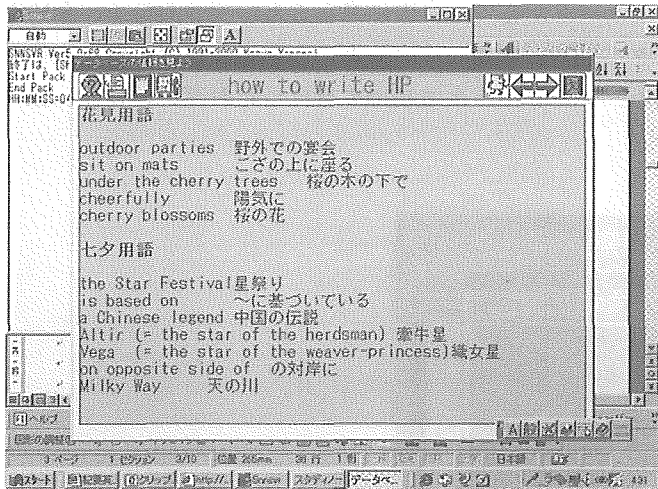


図3 教師自作の英語表現集

第4時には、ほぼ出来上がった各自の作品を、電子メールの機能を用いて教師とALTに送信し、アドバイスをもらう準備をする。教師とALTは第5時までに英語や日本語の表現の改善すべき点や、画面上の改善すべき点について電子メールの返信の機能で生徒一人一人に送信しておく。

ALTからのアドバイスは英語の添削ではなく、ひとりの外国人からみて、生徒の英語がきちんと通じるかどうかを伝えるメッセージを送るようにした。そうすることにより、よりオーセンティックな活動となると考えたからである。したがって、生徒はそのメッセージを理解し、どこを直せばよくなるのかを考えることが次の時間の最初の課題となる。



図4 授業の様子（第4時）



図5 授業の様子（第5時）

第5時には、ALTや教師からのアドバイスをもとに最終的に完成させる。ALTを教室に迎え、電子メールに書かれたアドバイスの内容について実際に1対1で話し合いながら英文を完成させ、出来上がった作品をデータベースに登録させた。データベースに登録された作品は、教室内のどのコンピュータからでも自由に見ることができるので、互いの作品を鑑賞し、さらに意見をデータベースに記録していくという学習を行なった。生徒たちはいきいきとHP作りに取り組み、データベースで初めて目にしたお互いの作品に歓声を上げ、目を輝かせていた。

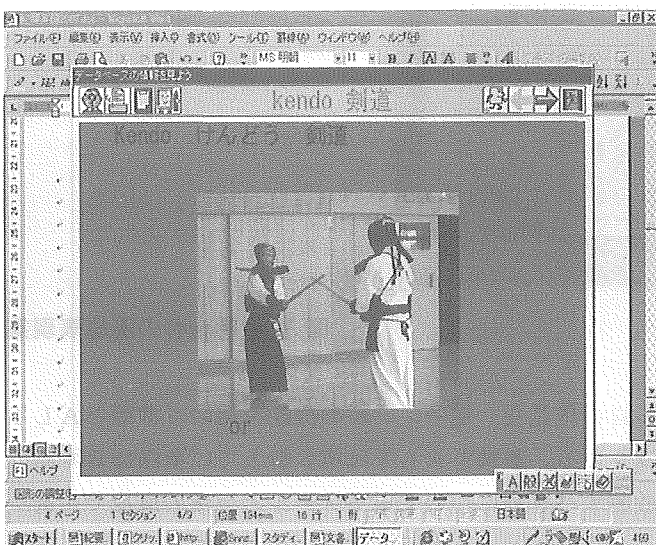


図6 生徒作品 表紙のページ



図7 生徒作品 英文のページ

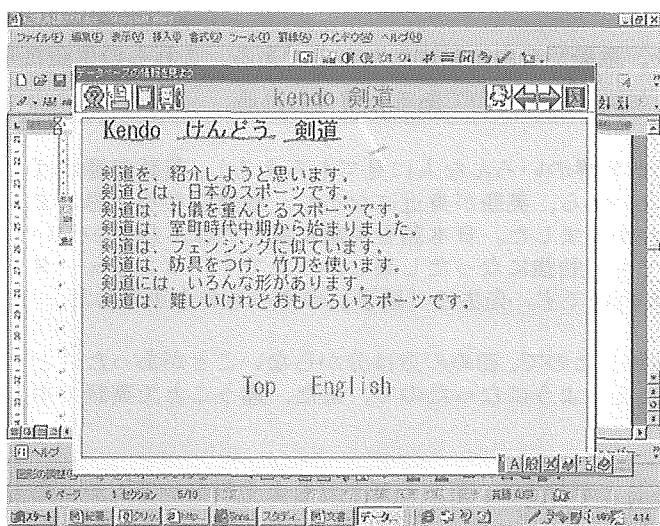


図8 生徒作品 日本語のページ

第6時には、前時の意見交換をもとに、各自の作品をより良いものにするための時間を設定した。生徒は互いの作品から学び合い、互いの良い点やデータベースに書き込まれた助言をもとに、自分の作品の日本語や英語の表記、絵や動作をチェックし、より良いものに改善する活動を行った。最終的に完成した作品を再度データベースに登録し、教師がデータベースを一括してホームページ変換し、インターネットで情報発信した。情報発信の際には信州大学教育学部附属教育実践総合センターのホームページに掲載させていただいた。(http://cert.shinshu-u.ac.jp/sch/chu/chita/menu.htm)

Microsoft Internet Explorer - [ファイル] 編集 表示 参照 形式 ツール 拡張機能 ヘルプ

ファイル(F) 編集(E) 表示(V) お気に入りに(I) ツール(T) ヘルプ(H)

戻る(B) 進む(F) 停止(S) 更新(U) ホーム(H) 検索(S) お気に入り(I) 履歴(H) 印刷(P) サイズ(S) 印刷(P)

アドレス(Ad) http://cert.shinshu-u.ac.jp/sch/chu/chita/2000/cul/ds/600015/index.htm

移動(M) リンク(L)


	データベース: JAPANESE CULTURE I					個人情報: 98 件の一覧へ 子情報: 1件
番号	親子	種類	題 名	年 月 日	キーワード	
1	E	作品	Jan-ken ジャンケン	2001年02月28日14時42分	Game	
2	E	作品	Bon Festival お盆	2001年02月28日14時45分	Festival	
3	E	作品	Rakugo 落語	2001年02月28日14時48分	Culture	
4	E	作品	Health-Sports Day 体育の日	2001年02月28日14時58分	Sport	
5	E	作品	Sumou 相撲	2001年02月28日15時00分	Sport	
6	E	作品	The New Year お正月	2001年03月01日08時40分	-	

図9 HPで公開されたデータベース

図9 HPで公開されたデータベース

#### 4.3 授業を終えて

以下は、授業を終えての感想を、生徒が自由に記述したものである。これらの生徒たちの素直な感想は、本実践の効果を如実に表すものであると考えられる。

- A 自分で書いたりしたものが世界のいろんな人に見てもらえるし、英語で書けば辞書を開かなければできないから、英語が身近になるし、勉強になると思います。自分の未熟さもよくわかりました。日本語を英語に直すのは、むずかしいし大変だと思いました。でも、勉強になったし楽しかったです。コンピュータは便利ですね。また、やりたいです。先生の「扇子」のやつもお上手でした。
- B 初めてコンピュータで勉強したので、初めの方は分からないことがあったけど今はほとんど自分の力で使えるようになったので、また、違うことで英語でホームページを作りたい。
- C 新しい英語の単語も知ることができた。英文の書き方もよくわかってよかったです。表現の仕方もよくわかった。英語ってスゴイ楽しいーと思いました。英語だけじゃなくって、コンピュータにも慣れることができたのでよかったです。日本文化だけじゃなくって、他のホームページを使ってみたりして、英語の授業でもっと、コンピュータが使えるといいなと思った。
- D 私は英語は苦手な方だけど、こうして先生に見てもらってコンピュータに入れていくという勉強は、英語を好きになるいい機会だと思う。もっとコンピュータ室でやりたい。
- E とても楽しかった。自分が作るだけでなく、他の人の作品を見たり、感想を送りあったりしてよかったです。他の人の意見も聞けて反省もできました。
- F ホームページ作りをして新しい単語がわかった。自分の作ったものを他の人に見てもらえるというのはとても嬉しい。
- G とてもおもしろいので、英語の授業を全部コンピュータを使った授業にしてほしい。スタディノートで自分のものを作る時に、他の人の作品や意見を参考にすることでとても役に立った。
- H 楽しかった。特に友達のホームページを見て、それに感想を書いた時、もっとやりたいな、と思った。
- I とても楽しかったです。けれど私は少し苦手な感じがしたので、みんなにおいていかれるようでさびしかったです。またやってみたいけれど、もし次があるのなら、そのときはもっとゆっくりと時間をかけて今回より、もっといいものを作っていきたいと思いました。今回はあまり自分で納得できていないので、夏休みでも続きを作りたいと思います。

図10 授業後の生徒の感想

以上の感想から、スタディノートの教室内ネットワークで可能になったコミュニケー

ションを通して、英語の苦手な生徒も、得意な生徒も互いの良さを認め合うことができたのではないと思う。また、互いに刺激し合って学習全体のレベルアップを図ることができたと思われる。日本独特の文化を上手に表現するのはかなり難しいが、辞書だけではなく教師自作の表現集を参考資料として準備したことは効果的であった。今後もこのような表現集をもっと増やしてデータベース化し、生徒が主体的に活用していけるように支援したい。

ただし、コンピュータの操作において、やや苦手意識をもったまま、本単元の学習を終えてしまって、十分に満足のいく作品ができなかった生徒が少数でもいたことは見逃せない。生徒が学ぶおもしろさを感じるためには、自分の能力が十分に発揮できたと実感できるような体験が必要である。そのためにはコンピュータ操作が英語学習の障害にならないように、適切な助言や支援をしていかなければならない。

## 5. 考察

スタディノートを活用した英文ホームページ作成の自己表現活動を通して得られた成果を次のようにまとめたい。

- ① ホームページで日本文化について英語で紹介するという活動を通して、単に身近なことを英語で表現するだけでなく、世界に情報発信するという状況が設定されることにより、各自の英作文力の習熟度に応じ、自分の伝えたいことを外国人にわかるように受け手を意識して英文を書こうと努めることができる。(生徒の感想A)
- ② スタディノートを利用すると、ホームページ作成のための言語を意識せずに比較的容易に作品を制作することができるので、生徒は技術的な負担をあまり感じることなく英文ホームページを作ることに関心をもち、意欲的に取り組むことができる。(生徒の感想B)
- ③ 日本文化に関する英語について教師自作の表現集を作成し、スタディノート上のデータベースに登録して生徒が容易に参照することができるような手だてをとることにより、辞書も活用しながら自分の力で日本文化についてまとまりのある長い文を意欲的に書いたり、積極的に理解しようとしたりする主体的な学習活動が可能となる。(生徒の感想C)
- ④ スタディノートの「電子メール」機能を利用して、生徒の作品についてA L Tと教師から生徒へ助言をした。特にA L Tからの助言は、ひとりの外国人からみて、生徒の英語がきちんと通じるかどうかを伝える内容とすることにより、生徒は自分の書いた英語表現をネイティブスピーカーがどのように受け止めたのかを知り、よりよい英語表現について自ら考えるというオーセンティックな活動が可能となったと考えられる。(生徒の感想D)
- ⑤ 「データベース」機能を活用して、生徒同士の作品について相互に鑑賞し合い、意見交換をする活動を通して、互いに刺激し合い、よりよい作品制作への意欲を高めることができる。(生徒の感想E, F, G, H)

## 6. おわりに

授業者にとっての一番の収穫は、生徒たちの学ぶ意欲のすばらしさに改めて気づかせてもらったことではないかと思う。これまでの単なるレポート形式の自己表現活動では、あまりみられなかったが、ホームページを作成するという学習、すなわち「世界に向けて情報発信する」という状況を設定することによって、多くの生徒が主体的・意欲的に学ぶ姿をみせてくれた。生徒の英語学習に対する意識が変容したと実感している。そして、優れたツールであるスタディノートを活用することにより、魅力ある授業が創造できたことは筆者にとって大きな喜びである。この一連の学習活動が英語の授業改善の一例となったととらえてもよいであろう。

今後はスタディノートで同様の活動をしている学校との学校間交流の活動を開始するなど、生徒の学習意欲を喚起することのできる、より魅力ある学習活動を取り入れ、さらなる英語の授業改善を行っていききたいと思う。

### <参考資料>

- ・余田義彦，1998，「CSCL 表現・思考・対話で構成されるコンピュータ学習—インターネット・校内LANをどう教育に活かすか—」，科教研報，Vol.13, No.1
- ・「ミレニアム・プロジェクト」<http://www.kantei.go.jp/jp/mille/991222millpro.pdf>

(2001年3月31日 受付)